

ユートピア主義のアウトライン

秋山三善雄

アナキズム的ユートピア

私は、ユートピア主義が社会主義本来の姿だという意見を30年以上にわたって持ち続けている。

アナキズムを含めて、一切の社会主義の流派は、本来的にはユートピア主義だといふのである。

ユートピアは元より平和な社会である。単に戦争や内部闘争がないというに止まらないで、積極的に友愛に充ちた、親和的でさえある社会であり、自由と平等が、社会の一切の制度の中に保証されていなければならない。政治的には完全でかつ直接的な民主主義が行なわれていなければならないし、経済的には生産面では才能に応じて労働し、消費面では必要に従って消費使用することが当然であるような平等が保証されていなければならない。ここでは強制原理は要をなさないのだから、権力、政府、国家は無縁のものとなろう。

これはユートピアに違いないが、それを実現するまでには、あるいはそこに到達するまでに現存する強制の制度は存続すると見なければならない。一挙に国家を廃止しようとしたどんな企てもかつて成功したことがなかった、これからも成功する見込みがない。

ところで、積極的に国家が自由への必要不可欠の跳躍台であるとする説と、その機能がほとんど無用になる状態を築き上げることによって、質習的に人類にのしかかっているのではないこの制度を除々に排除してゆく方法とがあるのであるが、この二つとも共にユートピアと認めるのが正しいのである。

要すれば、ユートピアは人間主体の史観を採る立場からでなければ考えられないものである。その立場に對立するものは、人間不在の唯心的・唯物論的必然史観である。従来はこの二つの史観以外に史観はなりたないとする考えが常識化してきた。しかし、必然のうちにユートピアは生まれ出る契機を持たない。偶然にか、故意にか、ユートピアと結合した必然史観が行われたことは何人も知っている。しかしそれは所詮不毛な思想の迷うでしかない。

ユートピアは、人類の単なる夢ではなく、その構想力と知性と意志を以て、この地上に構築することのできる計画となった。近代のユートピアはそれ故に社会主義となり、権力を手段とする派と、それを可及的に排除して遂に消滅に至ることを指同

する派との二つを包含することとなったのである。

こういう立場から我々は、レーニンのユートピアとアナキズム的ユートピアを対照的に取り上げることができるわけである。歴史は人間を疎外して成り立たない。人間が自然にはたらきかけ、人間が人間にはたらきかけることによってしか生まれない。ユートピアもこのようにして生まるべくして生まれたのである。ソ連の革命において、中共のそれにおいて、その他国家的革命において取られた路は、すべて強制を原理とする社会を可と信ずるものであり、一言にして言えばレーニン主義なのである。マルクス・レーニン主義とは言え必然史観を採るマルクスがそれらの革命で演じた役割は盲然であって、レーニンの明と、計画と、勇断と意志がこれを成し遂げたのである。

ユートピアの現実性

しかし、強制を以て自由を獲得することが果して可能でかろうか。量から質への変化、そういうことを信じ得る根拠がどこにあるのであろうか。弁証法を以て新しい知識に達することは不可能である。普遍論理(形式論理)がそれを可能にする唯一の途である。これはベルグソンがいったことばであり、W.ポッバーがいよいよ明らかにしたところである。所謂唯物弁証法の論理に依って正論を射た例を世人は多く知らないのである。眞の社会科学といえるものは、ポッバーのように「漸次的社会工学」というべきものであろう。

レーニンの方法を以て、強制のない、自由のユートピアに至ることは、古い比喩だが、木に依って魚を求める類いである。それは明らかに過誤を冒しているのである。

さらば、アナキズムではどうあろうか。近代アナキストは暴力の保徒であった。暴力に依って、テロルに依って一挙に国家を廃滅できるとしたが、それは同じく過誤であった。次にそれは階級闘争説を取り入れて、プロレタリアと手を携えることに依って、所謂直接行動に依って支配階級を追求することができると信じた。サンジカリストはたしかに、少なくとも一時期は、アナキストと思想も行動も共にするかに見えた。自由連合、相互扶助はユートピアを約束するかに見えた。しかしこれもその誤りがたちまち明らかにされた。プロレタリアはマルクスが言ったように人民のほとんど全体と一致するまでには発展しなかったし、ブルジョアも機械のように石頭でもなかった。自作農民も

皆無にはならなかったし、中小企業も滅亡もしなかったし、ホワイトカラーはいよいよ増大するし、ルンペンも単なるくずではなくなり、失業者事業であるかなきかではあってもそのその生存を続けることができている。

こうした大衆の中のプロレタリアだけを革命の聖徒とすることは、革命の倫理が許さない。また、プロレタリアはそれ自身内部分裂をして労働貴族を生んで行った。労働組合は思想団体でないが故に除々にそれは支配階級が造っている国家に以て組織と化して行った。

もはや、サンジカリストやI.W.W.の会員はアナキストが求めているような自主自治的な傾向も行動も取る興味を失って行った。強権的組織の方が、支配者の権力を奪取するにはより強力であり、より適合がよいと考え出したものの如くであった。強権的組織は常にピラミッド型の社会を成すほかないので、一人あるいは数人の頂点以外の一切の人民は下敷とされる仕組みであることを、またもや忘れて労働者独裁などという誘惑に乘ってしま^うのであった。組織された暴力は権力に転化しやすい、労働組合に自由と解放を求め^{よう}るのは妥当でなさそうだ。

階級の枠を超越しようではないか。バクーニンやクロボトキンが帝政ロシアの貴族であったことや、マルクスやエンゲルスやレーニンもブルジョアや貴族の出身であったようだ。幸徳秋水にしろ、大杉栄にしろ、彼等はプロレタリアというよりは支配階級に近い方の上であった。有島武雄や、武者小路実篤をもユートピアに数えるなら、彼等も同じく支配階級の出身であった。今日の学生運動はその名の如くプロレタリアではない、革命家は階級の制限を受けない。

こうして、我々はもう一度、社会主義の鼻祖オウエンに立ち戻ってみる必要を感ずる。それは歴史的必然の迷信を打破することであり、人間主体の歴史観を奪換することである。彼の失敗したことから学ばねばならない。歴史は人間活動の聖書である。歴史の中で法則を発見することは徒勞に近い。それから教訓を学ぶことがはるかに大切である。

ユートピアは必ず失敗するものとマルクスは共産党宣言でも記している。だが彼は人間が誤っては修正して正しい認識に近づく方法を見失ったが軽視しすぎたかした。試行錯誤というのが人間の知的行動の跡づけである。オウエンの企てはむだではなかった。ユートピアは、しかも自由で平等で親愛に

満ちた社会を築くことは不可能でないことがこの50年の間に実証せられたのである。イスラエルのキブツがそれである。日本にもそれに類する共同社会が生まれつつある。これらの計画が成功するためには、それを圧殺する外力がないということが第一の条件である。この第一条件の一つの場合として、民主主義の相当高度の発達ないし法的保証が考えられる。日本の心境部落や山岸会のようなユートピアは、厳密には、それはまだユートピアではなくて、その萌芽にすぎないのであるが、それが可能になったのは、現憲法の施行ということがあったからである。天皇制と、旧帝国憲法の下ではこれは生まれ出なかつたろう。

文化の原型は、どこかの人間集団のなかで、ひょっこり姿を現わすキノコのようにして生まれ出る。そしてそれに魅力があるなら、除々にか急にか、その地方に先ず流行伝播し、やがて他地方に移動していく、もびろんこれは、物理的の伝導など同一のものではなくて、人間が主体的にこれを選択するのであり、模倣するところから起る現象なのである。ソ連の革命が、幾分は押しつけによって他地方へ普及したが、それは活力がなく定着さえ危いことがあった、普通の手続で移動したものは、その地方地方の特質と和することによって、少しずつ変貌しつつ広い地域に拡まて行った。

キブツ的文化、ユートピアの一つの模範的ケースとしての、この文化もこのようにして、国内に拡まり、やがて国外へ移動して行くことであろう。キブツは50有年かかって229カ村に拡大した。日本の心境部落は自己形成に20年以上を要したが、これから移動を起すものと思われる。もう一つのヤマギシズム運動はある程度国内に拡まり、外国にも漸く注目を集め始めた段階である。

パトスとロゴス

すべてユートピアなるものは、人間主体的史観に立つと書いたが、さらにつき進めて言えば、自由なる意志を究竟者とする形而上学を基盤とする思想なのである。普通認識といえはロゴス的な認識のもとに外ならないが、ロゴスは相対の世界に働くための知力であるから、物と心がまだ分かれないう前の絶対を把握することは出来ない。これを能くする力は、人間以前からすでに具っている能力としてのパトスの認識力ということができる。これは

ベルグソンがいうように、対象と主体との合体であり、全体をつかむ唯一の方法なのである。この直感の能力は生けるものを生けるものとしてつかむ力であり、これに依って我々は、生命の実体を知ることを得るのである。ロゴスの認識は常に過去、死、静と共に働くのであって科学は主としてこの能力の所産である。これはそれ自体、道具であると共に道具を作る能力であるが、これで主客 分のそれを知るとは絶対にできない。19世紀末までの古典物理学は因果的必然の法則で支持されていたといえるのであるが、20世紀のそれは、不確定性の原理に到達することによって、ロゴスの限界を自ら知ったのである。我々は厳密には必然といえないので、莫然としか言えないことがわかった。ベルグソンの復活の時が来たのであり、生命の尊貴と、意志の自由が本当に社会観の根底とならねばならぬ時に再度直面したのである。

ロゴス万能、科学絶対の19世紀の思想は多かれ少なかれ、そうした風潮に影響されざるを得なかった。が、ここに忘れ難い遺憾事は、我々自由の使徒アナキストのい散して惜かないクロボトキンでさえ、アナキズムを唯物論化しようと努めた跡があることである。ロゴスに依らねば学問はないとされた時代のこととて同情に値いする過誤ではあったが、誤りは誤りであった。しかも、いわゆる機械的唯物論と称せられたものであり、曲りなりにも歴史を説くことすらそれに依ってはできなかった。彼は歴史的人間史観に依り静的自然を唯物論に任せようとした。そうして統一的世界観の形成に失敗したのであった。我々にはもはやそのてつを踏むべきではない。

ユートピアと民族主義

ユートピア主義者は、マルクスのように、祖国を持たない人間ではない。どんな思想も行動も今日までは、民族のなかにこそ生きたのであり、それに引き、それに背を向けたものに受け容れられたことはない。民族は生命に密着しているが故に、国家や、階級や、経済制度に先行する。われわれはどのような思想家であるより先に一つの民族の分子である。しばしば次にわたる戦争において、被支配階級は祖国を持たぬ者としてではなくして、それを持つものとして自らを証明した。民族を愛さない動機が実ることがどうしてあり得ようか。ただし、己が民族を愛することは、他の民族をにくむことであってはならない。われわれは日本民族を愛しても近隣の諸民族、世界の諸

民族を愛することを忘れ怠ってはならない。インターナショナルは、ナショナルを否定するものであってならないのである。

日本共産党や社会党が、見せかけの手段としての愛国や民族主義を掲げても国民は敏感にその虚偽を感知しているのである。保守政党が、資本主義の非倫理性や、旧来の陋習と一体をなし、敵性を蔵していることを看破しつつもなお国民は、その心情に一片の見せかけでない愛国心を見て取っているのでもあろうか、選挙毎にその優勢を保っているのは、単なる物質的利害関係に帰せしめ得ない何かを感じしめるものがあるようである。

創価学会の隆盛の一因は、右に述べた愛国心ないし民族愛に関連するもののように私には思われる。また、世界の新興国のあの力は決してマルクス・レーニン主義などではなく、むしろ、それと抱き合わせた民族主義なのではないか。民族主義は民族主義としてだけ動くよりも、何らかの利害関係と共に浮沈することが多い。わが国は、資本主義と共に民族主義の最盛期を迎えかつ送った。世界のこの民族主義熱の高潮時に独りわが国のみが、己の民族をダシしている観のあるのは、甚だ歎かわしいことである。ユートピア主義者は、民族を愛することを決して忘れてはならない。

次に現在の政治とのかかわりあいについて、一言しなければならないのを感じる。

アナキズムは読んで字の如く政治・政府を否定する思想・運動である。しかし、それは直ちに否定できないことは、前記の通りである。それは、ただ、ユートピアを充実・拡大する過程のうちでだけ、その存在意義のないことを互に確認し合い、他に認識させ、ついにはそれから脱却することによって、ユートピアを完成しなければならないのであるが、単位ユートピアが国家全領域に拡大し、隣国諸邦もそれに倣うときが来れば、それはたしかに完成の或る段階であり、自由連合が国家に代り、そういう連合と連合の更に高次の連合の成立する時でもある。

少なくとも一国に単位ユートピアの数が増大して資本主義や、他の社会主義に成り代って行ける時が来るまでは、現実の政治と関連交渉を保持しなければならない。その際、われわれは、もはや過去のある時期の如く、すべての政党に背を向け、投票権を棄てるというようなことはすべきではない。時には積極的にさえ、ある政党のある政策、それはもちろん、われわれ

のユートピア建設にプラスとなるものを意味するが、それを支持すべきである。

(自由連合 1965年 105号)

アナキズムとユートピア

秋山三喜雄

大杉栄の死は、当時のアナキズム運動の^落日だった。それ以後にはも積極性のある報道をきくことができないのである。

もちろん、アナキズム運動退勢の原因は彼とその妻の死だけではない。ソ連の革命成功は、彼等の死に勝る有力な原因であった。しかし、それらは確かに大きな原因であるにはちがいないが、それは外在的である。そのほかに、本来的な原因がなかったであろうか。たとえば、理論の不備といったような。

もしも、そうした内在因というようなものがないとすれば、一度は衰退に陥ったとしても、また更生があるはずではないか、ところが彼等の死去から数えてもすでに40年余りの才月が流れ去っているのである。何という沈滞の長さであろう。

それではアナキズムは、もはや存在理由を持たない社会思想にでもなったというのか。それに対しては否である、百遍も否である。世に不自由、不平等があり、邪が正を圧している事実がある限り、アナキズムはなくなるわけがない。ソ連の革命が成功したと書いた、それは権力的社会主義がそのあるべき姿において成就したことの謂であって「共産党宣言」が約束しているような、自由の王国と共産社会が同時に出現するという意味においてはいささかも成功してはいない。それはもはやソ連的社会において望み得る理想でないことが判明してさえいる。1961年の第22回党大会において、フルシチョフが約束した20年後の共産主義社会とは実は全体主義的福祉国家にほかならないからである。

人類の見果てぬ夢が、自由と共産の実現に在るとすれば、共産党的社会主義以外の思想と運動にまたねばならぬこと明々白々である。第1インター以来、この思想を追求した2つの流れは誰も知っているように、マルクヰ主

義とアナキズムである。アナキズムは、強権によってこの理想に到達することは絶対に不可能であると指摘してきた。マルクスの徒はそれを信じ、今それに失敗したのである。



アナキズムはマルクス主義とちがって、唯一の人物の識見ではない。百人のアナキストは百のアナキズムを表わすと言ってもよいのが彼等の拠って立つ原則であるが実際にはさほどバラエティに富んでいるわけではない。また、その中には今日の眼から見て明白な誤見であるものもある。個人主義的なアナキズムと称するものはこの種のものである。また権力者や政府におしさえすれば理想社会が実現するかの如き行動を推奨したものもそれである。

かくして、真剣に取り組む価値のあるアナキズムとは社会主義的なそれである。その社会主義というものも決して全体主義ではない、それは個と全体の調和ある状態を意味していなければならない。人間が土台となる道徳がその社会生活を律しなければならない。直接で完全な民主主義と共産主義はこの社会の倫理的要請である。

このような状態が維持せられる社会が目指す共同体である。共同体は国家からも、利益社会からも区別され、人為的に創造されねばならない。アナキスト・コミュニズムの要約である。



階級闘争説は階級を消滅させないで、その維持存続に作用する。ソ連の革命が最終的にそれを証明した。

アナキストのうちアナルコ・サンジカリストは同じく階級闘争説を信じた。大杉が存命してその運動がいよいよ盛大になったとしても彼は結局階級の存続を肯んぜねばならぬのではなかったか。彼が闘争そのもののうちに美を見出したのは一つの危険信号であった。目的実現の努力に生きがいを感じるのは当然であるが、目的と手段が倒錯しているのは病的である。

階級は現実である。但しマルクスの階級が最も階級らしき階級である。そうはいうものの、如何なる資本主義国も、単純にブルジョアジーとプロレタリアートに分裂した例がない。農漁民層と、中小企業者層、それに年々増大してゆくホワイト・カラー層、これらはプロレタリアートに勝ってに代表されては堪まらないのである。そうすることが歴史的必然だなどと説教されてはいよ

いよ以って堪まらない。人間は人間として貴いので、階級人として貴いのではないから。

横倉辰治氏の「古典革命観」がどんな思想を背景にしているのかよく分らないが、多分にこのアナルコ・サンジカリズム的なものでないかと推察される。戦争による社会の混乱のようなものが起きない限り、革命は起きないであろうが、その戦争はまず起きる見込みがない。ゼネストで革命を誘発するくらいが精一杯というところ。よし、そうした革命が起ったとしても事後処理に当るものは力であろう。現在の支配層が勝ち残るか、新興支配層が政権の座につくか、それ以外になる公算は全くない。アナキストの献身的な暴力が如何に奪ったところで、政府主義者の暴力が必ず勝利する。これこそ歴史の訓えるところである。アナキストの力はその意図に反して、革命的暴力主義の他の派に利用されるくらいがせきの山である。

唯一つ、アナキスト的暴力が物をいう場合があるとすれば、それがすでに出来上っているものを防衛するところである。破壊の暴力はマイナスだが、防衛においてはそれはプラスとなろう。創造的暴力説なるものが行われたことがあるが、革命時における民衆の本能的、社会的創造力の発揮を待つための暴力をいうのだとすれば、それはほとんど用をなさない。「創造力」が働くには時間を要する、だから急の場合には間に合わないのである。クロボトキンの革命ロシアに戻ってから死に至るまでの最大の悩みはこのことに係っていたのではないか。マフノ運動にしろ、サバト運動にしろ、その悲しい結果は事前に分かっていたようなものだ。

○

大逆事件の幸徳秋水の言に、アナキストくらい平和を愛好するものはないという意味のものがある。われわれの運動は人間性奪還に在るともいわれるが、人間性は平和の愛好と結合している。われらは科学主義者ではなく、ユートピストである。決定論者ではなくて自由論者である。われらは許された自由を最大限に活用しなければならぬ。ブルジョア民主主義をあざけるのはよい、だがそれを活用することを怠ってはならない。このデモクラシーには、ブーバーのいう「隙間」がある。そこにこそわれらはユートピアを建設しなければならない。一度び成り立ったユートピアは文化として、文化存在の法則に従う。何等かの人間ケン引力があればそれは伝播する。理想郷のモデル

理想郷のモデルとして流行移動する。

「共産党宣言」は、こういう試みを空想的であり非科学的であるとして齒ガにもかけない。だがそんな強断などは何と喚いてもかまわないではないか。平和郷、理想郷のモデルを先ず創建することである。ソ連式革命といえどもやはりこの種の企てであつたにすぎないのであつたが、結果はただ失敗であつたというのである。

すでに生誕したユートピアはキブツにおいてトップを見る。日本にも山岸会があり、心境部落があり、新しき村がある。われらは、革命家としての心の準備をするよりもこの運動に積極的に参加すべきである。

(自由連合 第100号 1964年7月)